

平成 25 年度研究チーム活動中間報告（第 1 回目）

「アジア企業における経営理念の生成・伝播・継承に関する研究」

No.127 研究幹事：奥野明子（経営学部）

本研究の目的は、日本、韓国、中国、台湾、インド等のアジア企業の経営理念の生成・伝播・継承の過程を、学際的視点に立ったインタビューや参与観察などの質的調査によって明らかにすることである。具体的には、(1)アジア各国の個別企業の経営理念の生成、伝播、継承の状況、(2)アジア各国の個別企業の経営理念の背景にある文化的、社会的、政治的、歴史的要因と経営理念の関係、(3)研究全体を通じて、経営理念のアジア的共通性が存在するか否かという点を明らかにすることを目的としている。

2013 年度の主な活動内容は、研究会（5月、1月開催）と、海外調査出張（9月奥野、李 韓国ヤクルトの調査）、海外学会（3月 The 9th Annual Conference of the ASAHK 三井、藤本、河口、廣山 香港大学）での報告等である。その他にも、国内調査、国内学会・部会での報告など数多くの成果を生み出すことができた。これらの中でも、香港大学で開催された The 9th Annual Conference of the ASAHK が最も重要な成果だと考えられるため、以下ではこれについて述べたい。

The 9th Annual Conference of the ASAHK での報告は、パネルタイトル「アジア企業の経営理念—生成・伝播・継承のダイナミズム—」というテーマで行われた。第一報告者は座長として三井泉が「アジア企業の経営理念に関する研究—研究目的と方法—」というテーマで口火を切り、パネルの全体像を示した。わたしたちの研究の分析視点は、経営理念の研究としてただ継承、伝播に着目するだけでなく、それらを動的にとらえていることに特徴があることを強調した。第二報告は、住原則也が、「ゾロアスターの教えを「メタ理念」としたタタ財閥の経営理念—「包括的合理主義」のモデル—」というテーマで報告をした。住原の報告では、インド最大にして最も歴史のあるタタ財閥の経営理念の特性と、それが創設者である初代会長から現在の 6 代目会長まで脈々と受け継がれてきたことを示し、その背景としてゾロアスターの教えが存在していることを指摘した。第三報告者は、藤本昌代が、「社会に貢献する実践的科学技术の追求—島津製作所の経営理念の伝播—」というテーマで報告をした。藤本の報告では、高度な専門的技術者の多い島津においては、「科学技术を通じた社会貢献」という理念のもとに、あらゆる職種においても技術教育、自発的な勉強会などが日常的に行なわれ、それが理念浸透のしくみになっていたことが報告された。最後に、第四報告者の河口充勇は、「合璧工業公司（台湾）の経営理念継承」というテーマでの報告を行った。台湾をはじめとした華人社会の文化においては、「企業＝共同体」という発想が相対的にみて成り立ちにくく、企業組織といえども血縁関係が幅を利かせることが少なくない中、合璧工業会社の経営理念の実践・継承とそれに対する文化的拘束性について報告した。フロアからは理念の浸透のしくみへの質問や、理念が人々を悪い方向に向

かわせる事例を研究している研究者から、理念がよい方に働く時だけでないという指摘が寄せられ、それについてディスカッションを行った。

経営理念の研究は、経営学の中でも中心となる重要なテーマである。学際的、人類学的な研究アプローチを経営学に応用するという特徴をもつ本研究をより深め、また研究対象となる企業や国を広げるため 2014 年度も継続的に研究を進めていく。